

第1 策定の背景・趣旨

- ・当センターは昭和15年の開場以来、県内唯一の畜産研究機関として養鶏・養豚・養牛・草地各部門の研究開発を担ってきた。
- ・昨今の社会情勢の急激な変動により、畜産農家の離農が進む。

- 家畜伝染病(高病原性鳥インフルエンザ、豚熱、口蹄疫など)のリスクの高まり
- コロナ禍、円安、地政学的リスクによる資材、飼料、エネルギー等の高騰
- 気候変動による猛暑



中期運営方針を策定し、計画的かつ戦略的に

現場のニーズに即した研究を推進し

持続可能な畜産業 と 県民の食生活向上を目指す。



第2 中期運営方針の期間

- ・5年間（令和8～12年度）

第3 これまでの研究開発の成果・課題

(主なもの)

研究項目	成果	課題
大和肉鶏の供給危機	・原種鶏を県立高校にてリスク分散飼育 ・種卵の長期保存	・特に希少品種であるニューハンプシャー種の危機管理が重要
牛の受精卵移植の受胎率向上	・ホルモン製剤等による受胎率向上	・暑熱、栄養等飼養管理面の影響について研究が必要
豚の飼料の調製による肉質改良	・柿渋等の未利用資源や飼料米を活用	・飼料価格高騰のため未利用資源の活用や自給飼料の生産は喫緊の課題
耕畜連携モデルの推進	・飼料稲の小型ローンを活用した奈良県版モデルの構築	

第4 研究開発の基本方針

【重点目標】

県産畜産物のブランド力強化

環境に調和した畜産の持続性確保

【目標達成のために】

- ・生産者・行政・研究機関が連携し、課題解決型の研究開発を継続的に展開する。
- ・研究体制を強化し、成果の普及を通じて、技術の社会実装を促進する。

第5 研究開発の重点目標

1 県産畜産物のブランド力強化

奈良県産の畜産物の品質を高め、安定供給と市場競争力の向上を図ることで、県内畜産業の発展に貢献する。

(1)大和肉鶏の原種鶏等の維持・保存【大和肉鶏】

高病原性鳥インフルエンザ等の危機発生時に原種鶏等の早期復元を図るため、種卵保存・延長飼育・始原生殖細胞凍結保存等の研究を進める。

(2)効率的な優良子牛の生産技術の開発【牛】

栄養管理改善、受精卵生産体制整備等により、雌牛の繁殖効率改善を図り、優良子牛の安定的かつ効率的な生産を推進する。

(3)遺伝子マーカー等による育種改良【畜種共通】

抗病性や肉質評価に遺伝子マーカーを活用し、高精度な選抜・淘汰を行うための調査・研究を推進する。

2 環境に調和した畜産の持続性確保

気候変動や資源の制約に対応し、環境負荷を軽減しながら安定した畜産経営を実現するための技術開発と資源循環を推進する。

(1)暑熱・疾病・悪癖等による損耗防止技術【畜種共通】

家畜の損耗を防ぐため、暑熱対策にはICT機器活用による体温管理技術、疾病対策にはワクチン等、悪癖対策には各種資材の効果を検証する。

(2)自給飼料・未利用資源の利活用の推進【畜種共通】

飼料価格高騰に対応するため、自給飼料生産や食品残渣の活用を進め、資源循環を促進し、飼料費低減と品質維持向上を目指す。

(3)家畜ふん堆肥の利活用の推進【畜種共通】

高品質堆肥生産の実証研究や、オガコに代わる家畜ふん尿の水分調整資材の検討を行い、循環型畜産を推進する。

第6 効率的な研究開発の推進

1 PDCAサイクルの実施

- ・研究は計画立案[P]、実施[D]、年度評価[C]、次年度計画への反映[A]のPDCAで管理
- ・畜産技術センター研究評価委員会による評価を通じて客観性と信頼性を確保

2 人材育成と技術の継承

- ・OJTや研修、学会発表を通じて、知識・技術を継承
- ・研究・普及活動を適切に評価し、意欲を高める。
- ・知財リテラシーや倫理研修で成果活用と公正性を確保

3 他府県等外部機関との連携

研究資源を有効活用するため、他府県研究機関や大学、企業等との連携を強化し、意見交換や共同研究等を積極的に行う。

4 研究開発成果の情報発信と広報

- ・研究開発成果をHPや講習会等で生産者に広く公開し、普及を図る。
- ・学会等での発表や論文投稿を積極的に行う。
- ・インターネットを活用した情報発信を強化、外部機関との連携を促進

第7 業務・運営に関する重要事項

1 資金の確保

2 施設・機器の管理と更新

3 知的財産の保護と活用

4 研修等の受入

(参考)今後のスケジュール

令和7年12月	12月定例県議会報告
令和7年12月～1月	パブリックコメント
令和8年 3月	2月定例県議会議決
令和8年 4月	施行